

[資料] 安政地震と堺地域 — 金岡光念寺の被災記録 —

堺市博物館* 矢内 一磨

The Ansei Earthquake and Sakai: The Disaster Records of the Konen-ji Temple in The Kanaoka District

Kazuma YANAI

Sakai City Museum, Daisen Park, 2-cho, Mozusekiun-cho, Sakai-ku, Sakai, Osaka 590-0802, Japan

Till now, there have been few reports or material on historical earthquakes in Sakai City, Osaka Prefecture; it has been our task to promote historical earthquake studies in this geographical area. I focused my attention to the Ansei Earthquake, in which many case reports were generated all over the country, in order to work out a solution to the problem of the lack of records. In this paper, I attempted to clarify how the Ansei Earthquake shook and damaged the Sakai area when the earthquake occurred based on the the disaster records in the diary which has been handed down in the Konen-ji temple in Kanaoka-cho, Kita Ward, Sakai City. MATSUNO Shoi, the writer of the disaster records, was the chief priest at the Konen-ji temple during the earthquake. We have not found any records about the earthquake in the Kanaoka area; however, I have obtained good-quality data about the earthquake from the records MATSUNO Shoi.

Keywords: Ansei Earthquake, Sakai City, Osaka Prefecture, Konen-ji Temple, Kanaoka-cho

§1. はじめに

1854年に発生した伊賀上野地震・安政東海地震・安政南海地震は、文字通り幕末の日本を揺るがした。暦上では嘉永7年の出来事であるが、一連の地震後に安政元年に改元されたため、一般に安政大地震と説明をされている大地震である。

比較的近年に発生したこの地震については、各地で記録が残されており歴史地震研究の進展に伴って数多くの研究成果が発表されている。東海地震・南海地震については、発生の危険が叫ばれている。安政大地震における各地の被災状況を明らかにすることは、減災をおこなう観点から焦眉の急である。

筆者は、大阪府堺市域の歴史地震史料を探訪して、その成果を「幕末の大地震と泉州堺一堺真宗寺蔵『地震記』を中心に—」(『堺市博物館報』21号 2002年3月、堺市博物館発行)において公表するとともに、地震についての市民啓発に努めてきた。本稿においては、平成26年に新たに発見した大阪府堺市北区金

岡町に所在する真宗佛光寺派の寺院光念寺に伝来する安政大地震の地震記録を紹介する。光念寺の位置については、図1「大阪府堺市北区金岡町の光念寺位置図」を参照されたい。本資料は表紙に『日記』と書かれた冊子記録であり、光念寺納戸の公の日記である(以下『光念寺納戸日記』とする)。『光念寺納戸日記』は、寺内の日々の出来事を淡々と記録した文書である。日々の天候、寺の年中行事、金銭の出納などが淡々と几帳面に記される『光念寺納戸日記』であるが、ここに豊かな地震記録が残されている。

史料を使う場合には、史料批判が欠かせないことが史学の常識であることはいうまでもない。地震記録についても同様である。平成26年9月20日に第31回歴史地震研究会(名古屋大会)で西山昭仁氏が「文禄五年(1596)伏見地震における京都盆地での被害評価」と題してご発表をされ、歴史地震の史料評価について、A 地震発生と同時期もしくは、30年以内に被災地で採られた史料、B 地震発生から30年以降に被

* 〒590-0802 大阪府堺市堺区百舌鳥夕雲町2丁大仙公園内
電子メール: yanai@city.sakai.lg.jp

災地で採られた史料, C 地震発生から 30 年以降に被災地以外で採られた史料という三つのランクを提示された。そして, A ランクの史料の利用を推奨された。また, 地震の発生事実だけではなく, 揺れの方向や建物の損壊の程度についても詳細な検討が必要であることを強調された。これは地震史料の特性に基づいたランクの提示と研究の深化の方向を示されたものであり, 筆者もその見解に賛同するものである。

翻ってこの『光念寺納戸日記』の史料性を考えると, 以下のような史料の特徴が指摘できる。

第一に『光念寺納戸日記』が通年日記の記述の一部として, 地震発生当時のことを記録していることである。発生から時間をおくことなく, 記録がとられていることを示しており, 西山氏のいう A ランクの要件を満たしているといえよう。

第二に観測地と記録者が判明しており, しかも記録者は次章の「観測地と記録者について」で述べるが, 当時の河内国の地域社会において出色の自然科学の見識を有した人物であるということである。記録者が同一の観測地で記録していることは, 記録の価値を高めている。

第三に被災した建築物が現存することである。現在も当時の場所に建築物は残っており, 研究が可能な状態にある。

第四に地震発生の実事の記録のみではなく, 揺れ方向について詳細な記述を有することである。上記以外にも, 優れた史料性を数多く備えており, 本稿で報告をすることによって, 歴史地震研究に裨益すること大であると考え。

§ 2. 観測地と記録者について

2.1 観測地

この記録の舞台。すなわち安政大地震の観測地となった光念寺が所在する金岡町について, 紹介しよう。金岡町は, 中世においては金太郷(かなたごう)・金太庄(かなたのしょう)の名で呼ばれている。江戸時代においては河内国八上郡金田(かなた)村と称している。難波地域と飛鳥地域を結ぶ日本最古の官道である竹内(たけのうち)街道が, 金田村の中心部を東西に通っており, 古くから交通の要衝にあったことを窺うことができる。また, 特筆すべきは室町時代において金田が寺内町として発展したことである。15 世紀中頃に本願寺を支えた近江門徒の中心となった堅田本福寺門徒のひとりに「アヲ彦衛門」がいた。その子孫である二郎左衛門の後妻は和泉塩穴の人であり, 夫の死後

はここ金田の人と再婚。前夫所持の本福寺下付の本尊をもらいうけて, 金田に移っている。以上の経過は『堺市史続編』第一巻 431・432 頁に詳しい。現在, 金岡に所在する真宗大谷派光照寺・蓮開寺, 真宗佛光寺派光念寺・高照寺・西光寺・長光寺・佛源寺, 融通念佛宗金林寺の八ヶ寺の念仏系寺院は, かつての金田寺内を構成した諸寺の系譜を引いている。なお, 光念寺の縁起については, 松野聖意が弘化元(1844)年に記した『実録系譜』によれば, 保延4(1138)年源光信が大津よりこの地に移住, その後, 正中2(1325)年光信の子孫である松野久左衛門道輔が仏光寺第7世了源上人から光明本尊と親鸞聖人木像雛形を拝領し, さらに, 道輔の孫である資信が応永14(1407)年光信以来家伝の本尊阿弥陀仏を安置, 自ら道恩と名乗り松野道場無量壽光院として開基したとされる。

江戸時代においては, 最初は幕府領となっている。元禄以降には部分的に秋元喬知領となり, 宝永元(1704)年には一村を所領として与えられている。秋元喬知は老中も経験した有能な経済官僚であった。秋元家は近隣の黒土村に陣屋を置き, 蔵前村の観音寺を秋元家の河内国での祈願所とするなど, 豊かな知行を得ることができる河内の飛地経営に尽力をしている。

現在, 金岡町は堺市北区金岡の範囲に含まれている。戦後の高度経済成長期の昭和 31(1956)年には日本住宅公団による公団住宅第1号金岡団地が, それに続く昭和 41 年には新金岡団地が建設され, ベッドタウンとして急速に発展した。その後も官民などの事業者による鉄筋団地が建設され, 昭和 62 年には大阪市営地下鉄御堂筋線が中百舌鳥まで延伸。金岡には新金岡駅が開かれ, 大阪市内に通勤する人々のベッドタウンとしての町の性格が加速した。現在も鉄筋団地が建ち並び, 大阪府道 2 号大阪中央環状線沿いに大阪府営大泉緑地や郊外型店舗が見られるなどの典型的なニュータウンの景観が目立つ。しかしながら, 金岡は最初に述べたように中世以来の豊かな歴史を持った地域でもあったことを忘れてはなるまい。

2.2 記録者

つぎに, 記録者について述べよう。『光念寺納戸日記』を綴ったのは, 当時の光念寺住職松野聖意(まつのしょうい・1814~1879)である【図 2 松野聖意肖像(光念寺提供)を参照されたい。】。光念寺の第 15 代住職にあたる僧である。

松野聖意は, 地域史研究においては近世から近代

への過渡期の教育者として知られており、福島雅藏による研究がある。福島は研究成果を最初に『堺市史続編』第1巻の1125～1130頁で発表。のちに福島の単著『近代的「学校」の誕生』(1991年10月、創元社)に、収録することでより広く学界に紹介をした。以下、福島の研究に依拠して松野聖意のプロフィールについて紹介をする。

聖意は、文化11(1814)年1月30日に生まれ、文政5年4月に本山で得度し、本山の学寮で4ヵ年修業したという。ついで堺市中の教育機関である郷学所の小川敬斎につき漢籍を学び、さらに梵曆(インド暦学)を専門律師につき修業している。なかでも聖意は梵曆に大いに興味を抱き、その後、梵曆や須弥界曆の解説などの著述を行った。さらには、梵曆を研鑽する結社である梵曆社中を結成し、有志と活動をしている。

聖意は自らの寺の境内に学塾を開設、善学処と名づけている。善学処の創立が何時であるのかは明確にはしがたいが、『日本教育史資料』によると、天保7(1836)年に設けられ、皇・漢学のほか天文学および詩文などを教え教師は男子2名であった。その教師はおそらく、聖意とその子松野聖如をさすと思われる。塾生は男子50名居たと記されている。善学処は明治4(1871)年頃に廃業をしているが、翌5年に堺県の郷学校が光念寺に設置され、聖意はその教師となっている。そして郷学校を基盤にして、同6年に河州第一番小学が発足をしている。同校は現在の堺市立金岡小学校につながっていく。近世近代のこの地域の教育を聖意と光念寺が連続して担ったことは、教育史上においても特筆に値する。

また、仏教天文学や梵曆に深い造詣をもつ聖意は、望遠鏡で天体を観測しており、愛用の物が光念寺に残っている。

『須弥山儀銘并序』・『須弥山儀十二難』・『仏教談天義』・『須弥山儀十二難対弁』・『日月行品転輪抄』・『日月行品再考普門義』など仏教天文学についての著作も多い。自然科学の観察研究や教育について、河内地域において他に並びない見識をもつ人物といえる。

文久元(1861)年12月に住職を子の聖如に譲った後は、和歌・詩文や点茶・裁花を楽しんでいる。塾生と数回にわたり、大和の月が瀬・笠置山方面にかけ観梅旅行に赴き、多くの漢詩をつくっている。後述するが、住職在任中の日記のなかにも、蓮を愛でる記述が多く見られる。

第16代住職聖如は、弘化2(1845)年12月27日の

生まれで安政元(1854)年10月25日に本山で得度し、文久元(1861)年12月に父に継ぎ住職をおそい、本山の学寮で3ヵ年修学、その後も父につき従学し、父子相ならび学塾の教壇に立った。

本稿においては、光念寺所蔵の光念寺納戸日記(図3 嘉永7年『光念寺納戸日記』(光念寺蔵)を参照)のなかで、松野聖意が記録をした安政大地震に関わる部分を翻刻し、内容について解釈を加える。一般に納戸は施設の資財の収納場所であるが、それから派生して組織の金銭・物資の管理出納をつかさどる部署名をさす場合にも使われる。したがって『光念寺納戸日記』は、松野聖意の私的な雑記帳ではなく、光念寺の公的な記録と考えてよい。

書き損じはほとんど見られず、何らかの下書きをもとにして清書をしているのではなからうかと感じる点もある。また、記述の不足を余白に補足として書き加えたような筆跡も間々見受けられる。記録の豊富さや忠実性という点を補強している。さらに、異筆でないかと思われる部分もあるが、これは『光念寺納戸日記』が光念寺の公的な記録である以上、聖意以外の人物(たとえば息子の聖如など)が代筆や後の加筆を行う可能性は充分考えられる。ただ、この日記は聖意が光念寺第15世住職を勤めている時期のものであり、記録の形式・性質は聖意の見識・学識・個性を反映しているものと考えて間違いなからう。

さて、本稿では伊賀上野地震の2日前にあたる6月12日の部分から翻刻を開始した。採録期間に入るものは、地震に関係がない記事も、可能な限り翻刻した。『光念寺納戸日記』で綴られる日常の世界が、どのように地震を受けとめているのかを考えることも大切であると考えたからである。地震の記録が見られない部分が続く場合、適宜略している。大きな地震があった6月14日、11月4・5日には、特別に紙幅を割いて詳細に記録をしているが、余震の場合、日付・天候の下に、地震と発生時間を書き留める形式が多く見られる。これは、日付・天候とともに地震を日常的に記録すべき事象として、記録者である聖意が意識をしていることによるものであろうか。

§3. 史料の翻刻

史料を翻刻するにあたって本稿では以下のルールに則った。

- ① 原則として常用体を用いた。異体字は残した。
- ② 改行は史料の体裁に沿って行った。それが難しい場合は「」によって表現をした。
- ③ 史料の翻刻を略する場合、(略)とし §3末に省略理由を説明する補注を掲げた。
- ④ 原本の破損などで判読できない文字については、□で表現した。

⑤ 史料部分について2字下げとしなかった。

⑥ 【】で年月を補った。

(表紙)

「嘉永七年歳次甲寅

日記

光念寺納戸」

【嘉永七年六月】

十二日 晴

井源六召連 麦初穂并夏講施齋米集申候事 酒式合出ス」并七ツ茶出ス

(中略)

今朝寄口人在戸外告曰今朝日輪無レ光シテ而」有レ八稜云々、不レ知レ何人、騒然起見レ東方雲」気朦々不弁日体」

今朝平尾庄屋某出坂平野而見レ日出、本日之外」左右有両日体貌雲氣所映乎奇々」

十三日 曇至雨或晴不定

此頃尾宿ニ在レ異星、相并寸許一夜白氣見レ南天、今日九時地震、八時亦再地震」日置氏方山桃老籠贈来候事」井万右衛門娘きぬ当寅五才薨、葬式初夜催法名妙衣」西光寺ニ而四ヶ寺勘定過 六百六十六本配当受取

十四日 晴 今夜丑上刻大地震、翼明六時再大地震 景半堺行幸便万印切手老升替取 米買廿七匁ト四百文遣ス

(墨引ニテ一行抹消)

福寿小紅玉紅蓮初放葩

十五日 曇風 大地震ニ候得共寺内無事漸々本堂瓦」老枚・屏瓦式枚落候間也

今曉八ツ時大地震当国ニ而ハ古来如斯大震ハ不存事ニ候、夫方時々」動揺至明六時又大震、但シ初之時方三分之一之動也、此時堺町家倒ル、ノ数ヶ所人多死傷、終日終夜動揺不止、四ヶ寺仲互ニ見廻候ニ往来致候

十六日 晴曇

福寿小紅蓮玉紅蓮全開 地動時々有之 日置大八郎入来

新在家藤浪方使来ル地震見舞旁申候、札老取候、権兵衛へ先キがし

十七日 晴曇 地動不止昼夜七八動

玉紅蓮零福寿蓮零余花翼朝散寿花也

十八日 曇微雨西南風

から権江百文先銭かし、井尻万右衛門初七日参詣御経読誦

地震昼夜六七動、就中今夜九半時巨動、右門入来」本山方廻状来十四日夜大地震少々破損有之候得共五尊無難候由也

十九日 曇微雨西南風 夜半過頗地動強シ 紅蜀蓮初開

地震猶時々有之 仏源寺方嶋鯛老尾被贈候、右門子息あら源ニすぎ買代老勿直渡ス、八百伊来、和州方帰候由ニ而、此度大地震伊賀国上野城第一大震南都第一・郡山第二」人家傾倒数百軒人死傷千余人古来未曾有之珍事也と申事

廿日 曇少雨夜小雷連々在西南

中嶋春庵仏源寺於て御兩人様招キ酒出ス 北深井嘉右衛門裏秀道入来

廿一日 曇晴 朝遠雷在東北曇 今日方地動止ミ申候事今晚初夜又地震

大八郎入来 伊賀上の城地震最烈敷崩レ落候由、且又江州膳所城湖中江崩込候由也

西教寺・野村元弥・植木伝兵衛観蓮遊来

廿二日 曇雨晚雷鳴頗近

廿三日 曇 地動尚不止 但し追々軽キ方

中伴外入江参詣、報恩寺へ寄、酒出ル、大青蓮初花全開

廿四日 曇雨午後晴 白縞蓮全開

高照寺入来、蓮開寺入来観蓮也 仏源寺方雲龍観蓮花

地動越前第一・美濃第二・伊賀第三・大和伊勢第四・古今無之大変と聞江候事

平尾浄安寺妻死去ニ付悔状并白銀式匁香儀として長光寺へ向け差出し申候事

廿五日 晴曇

町内定久寺・長光寺入来観蓮 紅金蓮初開

廿六日 曇土用ニ入

報恩寺入来酒出ス、上納金式朱預ル、夜西光寺・長光寺両寺方」上納金百匁ト式朱預ル

廿七日 晴

当寺分金式朱内外銀三ヶ寺式部、式百五十疋飛脚へ出ス」甲斐町西六間筋河吉迄右かり大八郎蓮花持参、曆判木方井上幸右衛門へあつらへ左海小間者屋にて蠟燭九十匁買代二匁渡し、附日向守百枚代三匁六分」半帗五帖代老匁九分、五匁五分

廿八日 晴曇

金老式朱上納取替之内源六方受取、日置方糲之袋小袋被贈候、暑氣見舞也、来曆写老枚送ル」百文から権江百文先かし

(略①)

【嘉永七年七月】

六日 曇晴 昼九ツ時地震

喜連方片江偏増寺へ行、虎屋切手三枚遣、今夕帰寺小倉屋□□老本買、住吉□□夕飯酒式百十四文払八十文かんてん五本四十八文かんざらし上、□□白砂糖

七日 晴曇小雨

日置大八郎入来、銀老匁七夕祝儀被贈候事、昼飯出ス

堺井上幸太郎外同老入観蓮ニ来ル

八日 晴

今日蓮花十二輪開 全盛白也
九日 晴
蓮花全盛,小刀屋久兵衛入来,ノコギリ壺丁・菓子小半斤買」
【安政元年一二月】
四日 曇晴 朝五ツ半過四ツ前大地震 夫方時々少動有之
辰下刻大地震長屋庇五間落かべ壺間落申候,庫裏西南へ傾キ壺間ニ壺寸余」御本尊台離レ御指疵付申候事,大工半口入,長屋かた柱入」大坂御堂権嘉九兵衛使二候,等覺寺行,金十兩預申候事 宮戸法満寺入来一宿
五日 曇晴 大地動 夕七ツ半時 又初夜半過大動」朝五八郎入来」申下刻大地震本堂瓦下候事,数百枚北西檐西かべ落樋合ヒ落候,通路仕切落茶所屋根落チ客殿口西かべ落ち庫裏西南へ傾ク,又五尺ニ付壺寸余台所式階離レ落,北庭の隅かべ半間落候,西南ノ屋角落候襖外レ」散落候,障子倒レ処々損傷大方ならず,北借屋かべ四間通り落申候事,戌下刻又大動」西上刻西南鳴動如雷,初夜頃堺大坂津波入人家流レ人損傷数不知
今夜四ツ時方俄ニ仮屋繕申候
酉上刻五尊御内仏悉乗物ニ奉載白沙ニ而番付
六日 快晴 朝方箆筒長持土蔵へ入
夜新田安兵衛報恩講供景半奉御坊高好後家とよ初七日三部経勤
地動時々有之,朝織田太三郎入来
七日 曇今暁七ツ過微雨大地少動時々有之
今夜少動未止,地頭方火用心して戸外ニ居候様触知有之
夜長光・仏源入来,玄関ニて酒出ス,かた柱半日入,北借家泊候被帰,門下講中六人して本堂屋根瓦ならべ申候事
八日 曇晴暁微雨 少震数度
かた柱入北借家繕右門入来
九日 晴 少震数度
御尊玄関江移奉る
十日 晴寒風烈 少震数度
石津行
十一日 晴寒風烈 少震数度有之
今夜仏源寺行,酒出ル,中尾行,秀道一件申入置事
今日方かた柱北西借屋十畳江入込申候事
十二日 晴風 少震猶有之
大八郎入来,かた柱八ツ時方入西借家繕 金壺歩式納銀壺所へ遣ス,」使景半
地震 十三日 晴寒風 微雨霰降
院主出坂 御本尊仏師江御供申候事,奉負人井清七」仏師ハ北久太郎町心斎橋筋南へ入東側京屋久兵衛と申方也
地震 十四日 晴寒風
西光・長光・仏源入来酒出ス,但し惣代上京ニ付相談

有之由ニ候事
地震昼夜兩度 十五日 晴寒風 外側本堂片附」秀道家移り致候事,庭前仮家取払申候事
大坂輪番方書状到来,御法事延引之由告来候
地震兩三度 十六日 曇雪 下陣本堂片附
仏源寺入来酒出ス,五日夕御本山兩御堂御取払白沙ニ五尊様御安置」院家・御堂衆・御番数度外固メ七日,四ツ時又大動猶五尊御遷座」無之
右之趣等覺寺方申来ル,大坂御堂へ返書遣ス
十七日 晴
今朝御若病氣大ニ進ミ,昨日ハ血鼻方出ル 香者御出
十八日 晴
院主出廻り,銀式勿菓子買,田中守逸ニ而御若菓三貼求」秀道大坂京久江遣ス,小使百文也,御内仏後光磨立,成就ニ及打帰ル
十九日 晴
御内仏報恩講執行御花式勿花善渡,御かさり十五取数式百代百廿七文渡炭壺俵代三勿渡,油壺斗代五勿渡,外小買物式百文渡,かうじ白味(諸味)壺斗式升遣ス」かうじ十四数取
金已上六拾八匁四分,田中守逸入来菓六貼取,秀道花善江花取遣ス
廿日 晴暮風
長光寺義惣代上京入用十七匁五分渡,此金百疋錢三十九文渡,金式朱ト五百文かして五兵衛後家方入,金二歩権右衛門方入
廿一日 晴
金三歩良慶払,金式朱源六方入,田中与兵衛六貼取」院主出坂権嘉兵衛召連,御本尊御迎申上候事」花善江七拾文払,四十八文昼飯・二百五十六文夕飯酒肴共受取渡ス」廿文菓代うゑ藤江遣ス」金百疋拾八匁田鶴方うり」金式朱錢三十文和田茂兵衛次払」羽織十重出費
廿二日 晴曇
御本尊御遷座之事 本堂御莊殿如元相調申候也
大經上卷一首請安樂国土ノ莊殿候
廿三日 晴曇 今夜五時地震
院主相廻候,田中守逸方御菓五貼取羊羹壺棹遣ス,上ノニ而羊羹天壺棹ヲ以断式十取」廿四文生姜まき買,六十文せんべい買,十式文茶を買
廿四日 晴陰 暁九時・明六時地震
田中守逸入来,菓六貼取
廿五日 曇雨 暁来東北風」明六時地震頗大動
権嘉年回兩人參詣,かた権へ渡,秀道宅修覆手間也
廿六日 曇 夕七ツ時地震大動
夜仏源寺へ行,酒出ル,次兵衛寒氣見舞肴壺籠被贈候事
(略②)
八日 晴 夜七ツ時地震
尼講再興相勤,甘酒出ス,仏源寺入来酒出ス,御本山

飛脚源四郎入来」から権へ百文渡
(略③)

十一日 晴 九ツ時地震・七ツ時地震・初夜地震西南
大鳴り

(略④)

(略⑤)

十四日 晴早朝地震午後曇少雨夜半方雨雪夜八ツ
時地震較大也

十五日 曇雪霽朝六ツ半地震

十六日 曇晴九ツ半時震

十八日 晴今夕地少震

廿九日晴

田中守逸江老円遣ス、八ヶ寺仲帳箱御書并金壹部錢
參百八十式文」又三十八文仏源寺へ渡、西光・長光
寺へ渡」五百七十文小刀屋久兵衛渡

大晦日 五ツ時大地震

西念寺方老貫六百文受取、柱喜江老歩渡、八百伊へ
老部渡中島へ六匁薬礼遣ス、四百文わん藤三郎家
賃之内取」六百文大利方取、式貫文権惣へ渡九拾文
才八郎、拾兵衛へ酒代渡候」差引渡九百文食部方受
取、拾小太郎方取、白江惣右衛門歳御礼入来

(略⑥)

五日 曇風

仏源寺入来」中嶋へ院主・一位・両八参る、高林入来、
八ツ頃地震、夜地震四ツ半頃

今夜女講中御法座久兵衛方時米五合志五膳、文ろう
そく老丁

六日 風 大落入来

七日 晴 今夜六ツ半地震

更池中レ田入来年玉銀老今夜秀道 致ス参り六人
沙汰致ス六人猶次郎家内娘同道ニ而」みかん式十
持来ル

(略⑦)

梵曆社中加増

旅宿信達南北大坂屋

泉州山中駅丸二(〇に二のしるしを墨で)

紀ノ川田井の瀬渡し

紀州狐塚覚円寺 興末末間小屋村正立寺」次郎丸
正覚寺磯瀬安楽寺」福嶋光源寺 若山湊 小野町南
側 貴志忠右衛門」外ニ高松村正念寺弟紀州岩佐
本勝寺養子ニ参り居候

若山方五里斗り坂越し南也

若山北新御中間町中峯亀太郎

御所ヨリ廿丁斗西南也、長良村続キ宮戸ナリ

和州宮戸村法満寺

略①6月29日～7月5日まで天候記録がほとんどで
あるので略する。

略②11月27～12月7日まで地震記載が無いため略
する。

略③12月9・10日、地震記載が無いため略する。

略④12月13日、地震記載が無いため略する。

略⑤12月14日～16日まで他の記載多く、以下に地
震の記録のみを抄出。天候の記録と地震記録を併記
している部分があるが、この段階では、天候と地震を記
録すべき対象としていると考えていい。

略⑥安政2年正月元旦～4日、

略⑦安政2年1月8～20日まで地震記載が無いた
め略する。また20日以降、2頁にわたり貸家について
の記述が見られるが略す。その次の頁に梵曆(仏教
曆)に関する記述あり。翻刻する。

§4. 翻刻史料の内容について

ここでは§3.で紹介をした翻刻史料の内容につい
て順を追って紹介をする。大意を把握することを第一
とするが、適宜、内容を補足していくことで判りやすさ
心がけたい。時刻については現代の時刻に直してお
いた。

4.1 嘉永7年6月の記録

12日(晴)の記録。

決まった法会の齋米を門徒から集めるという、年中
行事の記録からはじまる。しかし、今朝の太陽が日輪で
はなく、8つの稜がある歪な形であったことを他から聞
いた。また、複数の者からやはり異常な日の出の連絡
を受けて、その記録を行っている。宏観異常の記録とし
て興味深い。

13日(曇後雨晴、安定せず)の記録。

尾宿(さそり座)に奇妙な星と天の白気を観測してい
る。望遠鏡で観測をしたのであろう。天体に造詣が深い
聖意らしい。本日から、地震の記録を見いだすことがで
きる。

14日(晴)の記録。

1時頃に大地震が発生し、6時にも再び大地震が発
生した。現在の暦にすると、最初の地震は7月8日1
時20分、次の明け方の地震は7月8日3時49分の
発生となる。ところで、約4.6km西の真宗寺での記録で
は、この伊賀上野地震については最初の地震を夜9
つ時(7月7日23時33分)、次の地震を暁6つ時(7
月8日4時54分)とする。夜間であり混乱もあると思わ
れるが、両者に大きな齟齬はあるまい。

15日(曇・風あり)の記録。

昨日の大地震。寺内は無事であった。本堂の瓦が1
枚と屏の瓦が2枚落ちただけであった。1時頃に大地
震が発生し、6時にも再び大地震が発生した。14日の
最初の地震は前代未聞の揺れであった。明け方の地
震も大きかったが、最初の3分の1程度の揺れであ
った。今回の地震で、堺では数カ所で家が倒壊して多く
の死傷者が出たとのこと。

金田村にある4か寺は、互いに連絡をとりあった。
福寿蓮・小紅蓮・玉紅蓮が、今日初めて開花した。こ
こに登場する建物の位置については、図4 江戸時代
後期の光念寺絵図【境内部分抜粋】を参照。

16日(晴・曇)の記録。

余震が時々あった。福寿蓮・小紅蓮・玉紅蓮が、全開となったことも記される。

17日(晴・曇)の記録。

余震が止むことなく、昼夜7・8回の揺れを感じた。

18日の記録(曇で微雨、西南の風)

昼夜6・7回の揺れを感じた。とくに1時の揺れは大きかった。本山(京都烏丸仏光寺)より、廻状が来た。14日夜の大地震で本山の伽藍に少々破損があったが、五尊(真宗寺院でもっとも尊ばれる木仏寺号・聖徳太子画像・七高僧画像・前住宗主影像・宗祖影像の五つの信仰対象のことは無事であったとのことである。貸銭の記録や井尻万右衛門の初七日の読経などの日常も記録される。玉紅蓮も福寿蓮も散った。その他の蓮は翌朝に散り終わったと記されている。

19日(曇で微雨、西南の風)の記録。

夜半過ぎの余震は大きかった。余震時々。

昼夜6・7回の揺れを感じた。とくに1時の揺れは大きかった。大和国から帰ってきた八百伊が言うには、今回の地震被害は伊賀国上野城の被害が最大、大和では南都が第一、郡山が第二の被害であるとのこと。人家の倒壊は数百軒、死傷者は千人余りに達し、古今未曾有の事件となっているとのこと。

20日(曇で少雨、夜に小さな雷が東西南より)の記録。

近隣からの来客との交流も記される。

21日(曇・晴、朝遠雷)の記録。

今日から余震は止まった。近江の大八郎がやって来て、伊賀上野城の被害がひどく崩れ落ちたこと、近江膳所城が地震で琵琶湖に崩れ込んだことを伝えてきた。蓮を觀に来客があった。

22日(曇雨)晩にととも近くで雷が鳴った。

23日(曇)の記録。

地震が止まないが、追々に軽微になっている。外へ参詣に出て、報恩寺へ立ち寄った。大青蓮が初めて全開になった。

24日(曇雨、午後晴)の記録。

白縞蓮が全開になり、高照寺をはじめとする金田寺内町の諸寺が蓮をみにやってきた。今回の地震については、越前第一・美濃第二・伊賀第三・大和伊勢第四の様相とのかつことを聞いた。平尾浄安寺妻死去についての対応が記される。

25日(晴曇)の記録。

町内の寺からの蓮を見にお客さんが来た。紅金蓮が初めて開花。

26日(曇、暦は土用に入)の記録。

報恩寺・西光寺・長光寺からの本山への上納金を預かった。暦判木(聖意が研究している梵暦の関係)を井上幸右衛門へ注文。堺の小間物屋で蠟燭や半紙を購入。

27日(晴)の記録。

本山への上納金を飛脚に託した。暦の版木をあつ

らえ、蠟燭などを調達した。

28日(晴曇)の記録。

上納金取替のうち源六より受取、暑気見舞に日置から糶の小袋をもらった。札に、暦を送った。から権へ百文を貸した。

4.2 嘉永7年7月の記録

7月6日(曇晴)の記録。

12時に地震を觀測。喜連から片江の偏増寺(現在の大阪市生野区)へ行き虎屋の切手3枚を渡し、夕方帰った。かんてんなどの食料の購入。

7日(晴曇小雨)の記録。

日置大八郎の来訪。七夕の祝儀を頂き、昼の食事を出した。堺の井上幸太郎と連れ1人が蓮を見に来た。

8日(晴)の記録。

蓮の花12輪が開花、白色が全盛。

9日(晴)の記録。

蓮の花が全盛。小刀屋久兵衛(堺の開口神社門前の金物商)がやって来た。のこぎり1丁と菓子小半斤を買い、4匁2分を支払う。

10日以降日々の記録は、天候を初めとして几帳面に点けているが、地震は見られない。記載は、金銭の出納や払い出しのことが大半である。

4.3 嘉永7年11月以降の記録

11月4日(曇晴)の記録。

9時、10時前に大地震が発生。それから時々小さな振動があった。9時の大地震で長屋の庇が5間にわたって落ちた。同じくかべは1間にわたって落ちてしまった。庫裏は建物が西南方向へ1寸分傾いた。御本尊は台座から落ちて、指が疵ついてしまった。大工に半日働いてもらい、長屋にかた柱(建築補修に用いる方柱か)を入れて補強した。権嘉九兵衛、等覚寺へ行、金10両を預けた。聖意と同じく梵暦社中の宮戸法満寺がやって来て、泊まっていた。

この地震で被災をした御本尊については、図5と図6を参照。現在は本堂に安置をされている。

11月5日(曇晴)の記録。

17時大地震、初夜半過にも大地震。

朝、日置五八郎が来訪。16時に大地震が発生。本堂の瓦が数百枚落ちた。北西の檐(ひさし)と西の壁が落ちた、樋・通路仕切が落ちた。茶所屋根が落ち、客殿の西壁が落ちた。

庫裏が西南に5尺につき1寸あまり(4日の1間につき1寸に比べると、5日の方が小さい。)傾いた。台所が二階から離れ落ちた。北庭の隅かべが半間落ちた。

西南の角が落ち、襖外れ散乱した。障子が倒れ至るところの被害が只事ではない。北借家のかべが4間落ちた。20時に大きく揺れた。17時には西南方向で雷のような鳴動があった。夜の初め頃には堺・大坂を津波が襲い、人や家屋が流され大変な惨事となったようで

ある。22 時からにわか避難の仮屋を作った。17 時には本堂の五尊・諸仏を悉く乗り物に載せて、白沙の上に避難させた。

6 日(快晴)の記録。

朝から箆筒長持を土蔵に入れた。

夜、新田安兵衛報恩講、後家とよの初七日の三部経勤行法要を勤めた。余震が時々ある。朝に織田三太郎が来た。

7 日(曇・5 時過ぎ 1 時頃に微雨)の記録。

今夜は余震が止まらなかった。領主(金田村領主秋元家のこと。光念寺の西にある黒土村に陣屋があった。)から「火の用心」をして戸外に居るようにとの触れがあった。夜に長光寺と仏源寺が来たので、玄関で酒を出した。補修のかた柱入れ作業を半日。

聖意の門下生と光念寺の講中が 6 人で、本堂の屋根瓦を並べた。この日 9 時に豊予海峡地震が発生しているが、聖意の記録には、小さな余震が時々あるとの記述があるのみで、特記されていない。光念寺では、豊予海峡地震による揺れは感じなかったのであろうか。

8 日(曇晴・曉微雨)の記録。

余震数回。北借家にかた柱を入れる補修。

9 日(晴)の記録。

余震数回。5 日に白沙の上へ避難させていた御尊を今日、玄関へ移した。

10 日(晴寒風が烈しい)の記録。

小さな余震が数回。堺の南の石津村へ行った。

11 日(晴寒風が烈しい)の記録。

小さな余震が数回。夜仏源寺へ行った。酒が出た。中尾へ行き、秀道の 1 件を申し入れておいた。今日からかた柱を北西借屋の 10 畳へ入れ込む作業をした。

12 日(晴風)の記録。

小さな余震有り。大八郎が来た。かた柱を 14 時から入れて西の借家を修繕。金の出納。

13 日(晴寒風・微雨と霰が降る)の記録。

地震があった。光念寺住職が大阪へ。4 日の地震で損傷をした御本尊を仏師の許で修理するためである。御本尊は「井清七」(箱の墨書に送迎御供人清七・嘉兵衛とある清七である)が、お運びした。修理を頼んだ仏師は北久太郎町心齋橋筋南へ入東側の京屋久兵衛である。

このさいに、本尊を運搬した箱が、現在も光念寺に保管されている。箱には、被災した本尊を運搬した経緯についての墨書があり、歴史地震史料となる(図7「本尊を修理のため大坂へ運んだ箱の内側の墨書」を参照のこと)。

14 日(晴寒風)の記録。

地震があった。西光寺・長光寺・仏源寺が来たので、酒を出した。惣代は京へ行っている。

15 日(晴寒風)の記録。

昼夜と 2 度地震があった。本堂の外回りを片づけした。秀道が家を移り、庭の仮屋を撤去した。大坂輪番か

ら、法事を延引するとの手紙が来た。

16 日(曇雪)の記録。

昼夜と 2・3 度地震があった。本堂を片付けた。仏源寺が来たので、酒を出した。5 日の夕方、御本山では地震のため、五尊を安置した。院家・御堂衆・御番が外固めをした。4 ツ時にはまた大きく揺れたので、遷座をしなかった。このことを等覚寺から言ってきた。大坂御堂へは書状を返した。

17 日(晴)の記録。

御若(息子の聖如)の病気が進行、昨日は鼻血を出した。

18 日(晴)の記録。

院主が外出、菓子と菓を購入。秀道を御本尊修理を頼んでいる京屋久兵衛のところへ使いに遣り、先に仕上がっている後光を引き取ってきた。

19 日(晴)の記録。

報恩講の行事の花代金 2 匁を花善へ。かさり代金、炭代金、油代金、かうじ白味(諸味)代金など色々、合計 68 匁 4 分を精算。田中守逸に菓 6 貼、秀道を花善へ花を取りに遣わした。

20 日(晴暮れて風)の記録。

長光寺の惣代の京都市行きのお金を渡した。五兵衛後家と権右衛門から入金。

21 日(晴)の記録。

良慶へ金 3 歩を払、源六から 2 朱が入った。田中与兵衛から 6 貼取った。

院主が大坂へ修理が済んだ御本尊をお迎えにあがった。「権嘉兵衛」(箱の墨書に送迎御供人 清七・嘉兵衛とある嘉兵衛である)が、お伴した。花代・食事代・菓代などをそれぞれ支払った。

22 日(晴曇)の記録。

昨日大坂の仏師の許から還ってきた御本尊が、本堂の元の場所に戻る。本堂の荘厳は地震前の状態にした。大無量寿経の上巻を誦経した。

23 日(晴曇)の記録。

20 時に地震。院主が外出。田中守逸から菓 5 貼を受取、羊羹 1 棹を遣わした。羊羹・生姜まき・せんべい・茶を買った。

24 日(晴陰)の記録。

1 時と 6 時に地震。田中守逸から菓 6 貼を受取。

25 日(曇雨)の記録。6 時大きな地震があった。秀道宅の修復の手間代を払った。

26 日(曇雨)の記録。16 時大きな地震があった。夜に仏源寺へ行った。

(略②)

12 月 8 日(晴)の記録。4 時地震があった。尼講を再興して法要を勤めた。

(略③)

11 日(晴)の記録。

地震 2 回、初夜の地震では西南方向で大きな地鳴りがした。

(略④)

(略⑤)

14日(晴)の記録.

早朝地震,2時に大きな地震があった.

15日(曇雪霽)の記録.7時に地震があった.

16日(曇晴)の記録.13時に地震があった.

18日(晴)の記録.夕方に小さな地震があった.

29日(晴)の記録.

田中守逸・仏源寺・西光寺・長光寺・小刀屋久兵衛への金支払.

大晦日(この日のみ天候の記録なし)の記録.

8時に大地震があった.大晦日なので,諸方への支払いが記録される.

○安政2年元旦~4日の記録はあるが地震記事は見られない.

正月5日(曇風)の記録.

仏源寺がやって来た.中嶋へ院主・一位・両八が参った.高林がやって来た.14時頃に地震,23時頃に地震があった.久兵衛(小刀屋久兵衛か)から女講中への寄進があった.

6日(風)の記録.

大落がやって来た.

7日(晴)の記録.

19時に地震があった.松原更池の中レ田がやって来た.歳玉として銀1匁を渡した.今夜秀道が行事にまた6人の組が行事に来た.そのうち,猶次郎は家内・娘を同道のうえ,みかん20を持ってきた.

以下1月8日から20日まで記録はされているが,地震記事なし.

この後,3頁にわたって,金子勘定や土地に関する記述がみられる.しかし,地震に関する記録は見られない.その部分に関しては,翻刻を割愛した.

地震の記録ではないが,聖意が活動をしている梵暦の結社である梵暦社中についての記録については,翻刻をした.内容についてはいわゆるメモ書きであり,詳細を知ることはできない.しかし,紀州狐塚覚円寺をはじめとして,興末(興正寺末寺の意か)末間小屋村正立寺など記された寺院は,梵暦の結社員と考えてよいと思われる.今後の梵暦運動の研究の参考のためにここに記しておく.

梵暦社中の記載の後に,貸家についての記述が見られるが,とくに今回の資料研究との関係がないので割愛をした.

§4. おわりに

『光念寺納戸日記』の地震記録が,地震に特化した記録ではなく,発生した天災を日々の記録のなかに留め置いたものであることが,明らかとなった.とくに誇張することなく,金銭の出納や蓮の開花などとともに,冷静に地震の状況と被害を留め置く姿勢は,記録の確実さを示しているといえよう.地震のなかで揺れ方向などの事象を観察し,発生時間などの情報を整理し,これだけの記録を残しえた松野聖意の高度な知的能力は,特筆に値するものである.観測地がはっきりしており,しかも一定であることから地震発生時の当該地域での今後の被害想定にも活用が期待される.

また被災した建築物の現存は,被害想定をする場合の重要な助けとなる.堺市北区では**2.1 観測地**で述べたように,周辺で急速な都市化が進行しつつある.古くからの自然環境や建造物が失われていくなかで,光念寺と金田寺内町が歴史地震史料と歴史的環境を保全していることは,今後の歴史地震研究の貴重な財産であるといえよう.

この資料研究が,今後の歴史地震研究に裨益することを期待したい.

謝辞

貴重な古文書の公開とご本尊の画像掲載を御許可いただいた光念寺住職松野正剛氏に,記して感謝します.

ご教示やご協力を得た方々のお名前を以下に記して感謝します.

越後智雄・杉戸未地子・スムットニー祐美・中村晶子・中川百里香・春木優子・小林初恵・村田和男(以上敬称略).

対象地震:1854 伊賀上野地震・1854 安政東海地震・1854 安政南海地震

文献

『日本教育史資料』,1969,臨川書店

『堺市史統編』第1巻,1976,堺市役所.

福島雅藏,1991,『近代的「学校」の誕生』,創元社,189-194.

矢内一磨,2002,「幕末の大地震と泉州堺一堺真宗寺蔵『地震記』を中心に一」『堺市博物館報』21号,堺市博物館.

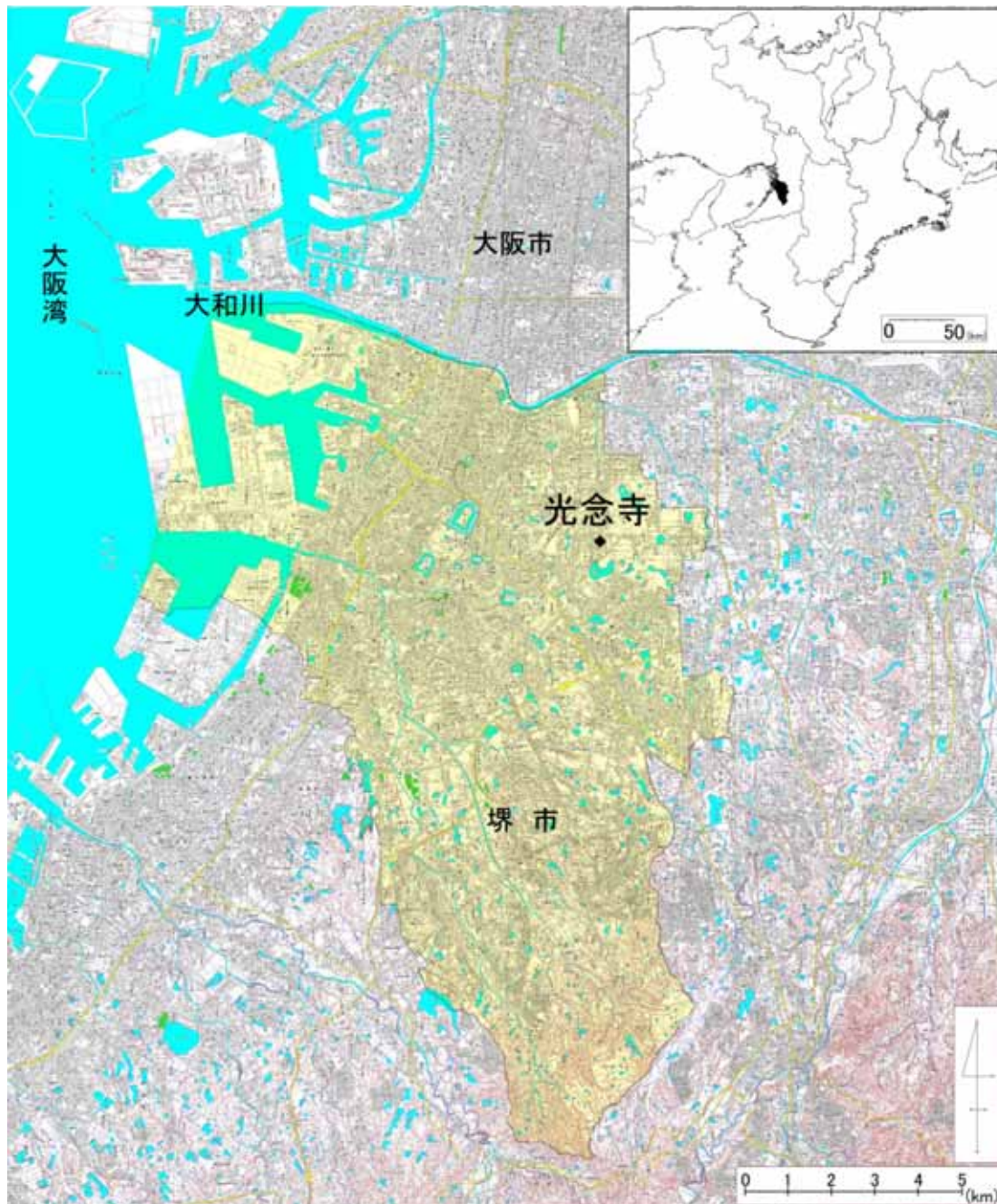


図1 大阪府堺市北区金岡町の光念寺位置図

Fig.1 A present map around Kōnen-ji temple(Sakai City, Osaka, Kita-ku, Kanaoka cho)

基図は国土地理院2万5千分の1地図画像

「岸和田東部」、「富田林」、「堺」、「古市」、「大阪西南部」、「大阪東南部」を使用

本図の作成については、越後智雄氏のお手を煩わせた。



光念寺第15世 松野聖意 明治5年前後撮影

図2 松野聖意肖像(光念寺提供)

Fig.2 Portrait of MATSUNO Shoi



図3 嘉永7年『光念寺納戸日記』(光念寺蔵)

Fig.3 Internal record of Kōnen-ji temple

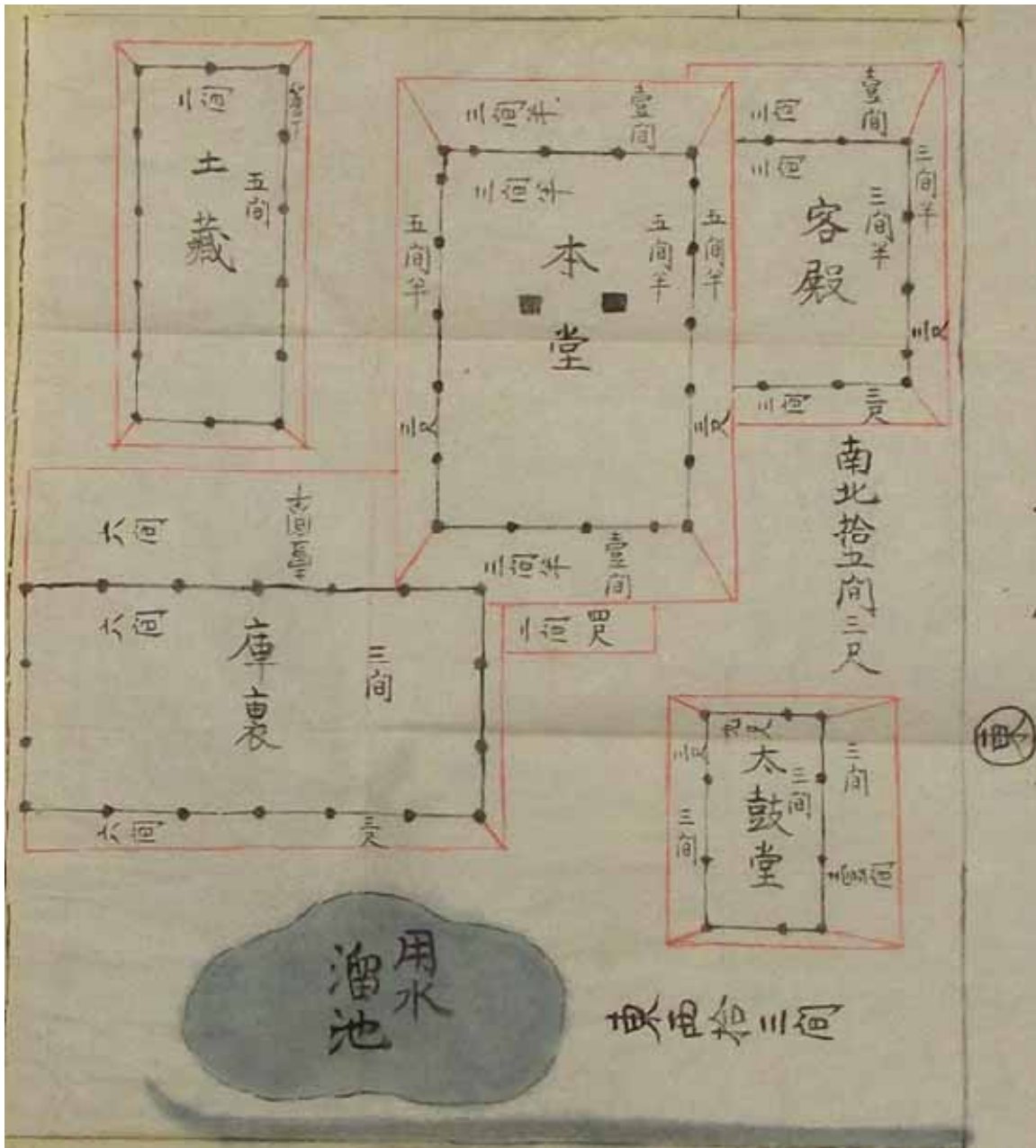


図4 江戸時代後期の光念寺絵図【境内部分抜粋】(光念寺文書)

Fig.4 An old map in the late Edo period Konen-ji temple precinct

本図は、江戸時代後期の光念寺絵図より、境内部分を抜き出したものである。本図によって、光念寺の建物の配置、方位が判明する。

当時の金田寺内には小さな水路や溝が縦横に通っていた。本図においても、境内地内に用水溜池が見られる外、溜池のすぐ横に水路を認めることができる。



図5 光念寺本尊無量寿如来像(全身・正面)
Fig.5 Standing Muryoju Nyorai (Konen-ji temple)

像高 77.5cm・鎌倉時代
右手と裾の部分が,11月4日地震によって,損傷をした.



図 6 右手部分の損傷(赤丸印)

Fig.6 Damage to the right hand part (the part which I surrounded with a red line)

大坂の仏師のもとで修理をしたが,堂内で指先の外れた部分が見つからず,そのままになったと思われる.



【箱蓋内側墨書】

(一段目)

「松野山光念寺

御本尊

無量寿如来

快慶安阿弥作

当山第十五世副講師聖意謹奉事」

(二段目)

「嘉永七年甲寅十一月四日五日

日本惣国大地震之節依

御衣御破損命浪華仏師

法橋新井良慶奉修補之

同月廿一日還安置」

(三段目)

「御箱并御修復料寄附

一金百匹 当院室 侍従

一金百匹 保次良妻 才

一金五十四 九兵衛妻 鎮

一金五十四 嘉兵衛妻 秋

一銀老文目 友七妻 須磨

奉送迎御供人 清七・嘉兵衛」

【箱本体底の貼紙】

御本尊無量寿仏 老躰

快慶安阿弥作

右此度御破損之处奉修覆候畢

嘉永七年甲寅十一月 大仏師法橋新井良慶

図7 本尊を修理のため大坂へ運んだ箱の内側の墨書

Fig.7 Description of the transport box

11月4日の地震によって損傷をした本尊(図5・図6参照)を大坂の仏師の下に修理をするため運搬した際に用いた箱の墨書。仏像の損傷が、地震によるものであることや運搬箱製作料や仏像修復料が光念寺に関わる女性たちによって賄われたこと、運搬した人の名などが読み取れる。光念寺蔵。

